

成果と課題

本研究大会においての成果と課題を、次の研究の仮説についての検証を踏まえて、以下にまとめた。

【表現】 表現において「なぜこの色にしたいのか」「なぜこの形にしたいのか」を問いながら自身の伝えたい思いや願いと関連付けた制作を行うことで子どもが主体的に他者や他のものをつなげる造形教育となるであろう。(仮説)

【鑑賞】 鑑賞において作者の作品に込められた思いを色や形から感じるとともに作品や他者との深い対話を行うことでつながりあえる造形教育となるであろう。(仮説)

1 研究の成果

(1) 仮説 について

公開授業(2)では、様々な素材の色や形、触った感じから、何ができるか発想する表現活動に取り組んだ。その中で、児童は「色のあるものは何があるだろう」、「ふわふわしているから、～が作れそうだな」など、自分なりに問いながら、思いや根拠へとつなげていった。その結果、自分の思いをより表現できる方法を探して、主体的に他者と交流し、自分のイメージを深めたり、他者の思いとつながったりすることができた。

公開授業(3)では、全員が笑顔で果物の形や色紙の配色に取り組んでいた。色紙の色を選ぶ際に、生徒自身が決めたテーマに沿って、4つの配色の同一色相、類似色相、対照対立色相、補色色相を覚えて色紙を厳選し、主体的に生徒が活動していた。お互いの選んだ色紙に対して楽しそうにアドバイスをし合う姿が印象的であった。「弟にもつくってあげたい。」や、「お母さんの誕生日用につくりたい。」など、制作する意欲を湧かせる活動となった。

実践事例(1)では、鑑賞につながる表現活動に取り組んだ。「魔法の虫めがね」をとおして見るものを焦点化し、児童は「色」や「形」に目を向けて考えた。また写真を撮る、コラージュする、などの児童にとって取り組みやすい表現活動によって、普段、絵を描くことが苦手な児童も主体性をもち、自分の思いや願いと関連づけた制作につながった。

実践事例(2)では、児童が身のまわりにある自然素材が色を表す画材になることへの驚きと関心から、その違いを見つけるとともに素材を生かした表現活動につながった。色の種類を分け、土絵具へと変化させる過程では、その感触を楽しんだ。自分たちで創った「色」だからこそ、台紙の色調なども確かめ、テーマを決めて描く活動ができた。苦手意識があるだろうと予想された抽象的な形にも、児童が見通しをもつことで主体的に取り組むことができた。

実践事例(3)では、地域の催しと関連した題材として表現活動に取り組んだ。生徒は作品を設置する場所やそこに集う人々を想定して、「あかり(の光、色、形)」がどのように見えるのか、どのように形づくっていくのかを発想した。表現をとおして地域や社会とのつながりを強く感じる事ができた。

実践事例(4)では、表現につながる鑑賞活動に取り組んだ。生徒は複数の描画技法を確認したことで、描き方と作品の関係について理解を深め、モチーフをどのように表すか、着想することができた。その中で、構図(形)や風景に表す色彩に思いを込めて表現することができた。

(2) 仮説 について

公開授業(1)では、同じポーズに見えて細部が異なる作品を提示することで、子どもたちは、手や立ち方、顔つきを比べることができ、「まねっこゲーム」を通して楽しく作品の形や色と関わり、子どもたち同士がつながることができた。また、絵が小さく分かれたパズルをしたことで、ワークシートには絵の細かい描写のことがよく書かれており、作品や作者と深くつながることができた。

公開授業(4)では、形や色彩などの性質から感情や情景など独自の視点をもつことができた。さらに対話的な活動を通して見方や感じ方を深め、「ゲルニカ」のもつよさや美しさ、意味深さを感じ取ることができた。

実践事例(1)では、前半の表現活動に続いて鑑賞活動を行った。作品の色や形に視点を持ち、自由にじっくりと作品と向き合うとともに、作者との対話から初めてわかった驚きや面白さに気付くことで、見方や感じ方を深め、作品や作者とつながり合うことができた。

実践事例(4)においては、鑑賞活動と表現活動とを組み合わせた学習構成を行った。技法と作品との関係への理解を深めることで、作者の思いに気づいたり、ふるさとの新しい魅力の発見につなげたりした生徒もいた。

2 研究の課題

(1) 仮説 について

公開授業(2)では、児童がそれぞれに準備した素材を使ったため、同じ素材から様々なイメージが広がるという感覚は十分に得られなかった。今後、素材を絞り、見方を変えることで発想が広がるという活動も設けることで、自分なりの問いや感覚を大切に、より積極的に他者とつながることができるようにしていきたい。

公開授業(3)では、無彩色の白、灰色、黒及び金の色紙、銀の色紙は今回の制作においては基本的に使用を不可としたが、制作の表現の幅や生徒の表現意欲をより高めるために使用させても良かったと思う。その際、クリムトの作品に見られる、金をデザイン的に扱った表現や、ワシリー・カンディンスキーの作品に見られる有彩色と無彩色の扱い方など、鑑賞によって学べるように今後の教材研究を工夫していきたい。

実践事例(3)では、児童生徒が表したい「色」や「形」に対して、素材が持つ特性が十分に生かせなかったという課題があった。今後は広く多様な素材を用意しておくことで、課題の解決につなげていく。

実践事例(4)では、鑑賞活動において作家等の作品を例示したが、鑑賞する際の視点を絞れていなかったといった課題があった。今後、視点を焦点化することを念頭に置いた作品提示のあり方を工夫することで、課題の解決につなげていく。

(2) 仮説 について

公開授業(1)では、まねっこゲームは、まねをしている人が遠くて比べにくい子もいたように感じた。ペアやグループなど、学習形態を変えても良かった。また、作品については形や模様のことについてふれた子どもが多く、色のよさに目を向けられるような発問や問いかけが必要であった。自分自身も、もっと作品の良さや背景を学んで、子ども達の感じ方を深めていけるようにしたい。

公開授業(4)では、鑑賞による学びを今後の行動に生かすことについて考える場面を設定できなかった。今後は次の題材、生活に生かす活動を取り入れたい。

実践事例(1)では、自作の「虫めがね」をとおして屋外で「ともだち」を見つける(発見する)活動を行ったが、見つけられない児童もいたという課題があった。今後、より一層視点を焦点化できるようにするために、サイズを変えて複数準備していくことで課題の解決につなげていく。

実践事例(4)では、美術の授業全般として「学習の振り返り」を次の学びに生かすに難しいといった課題があった。今後、「学習の振り返り」を蓄積し、他の題材や次年度に生かしていくことで課題の解決につなげていく。